

黒人彫刻の「芸術化」に対して稲垣吉蔵の台座が果たした役割

— バーンズ・コレクションを中心に —

たなか いながき りほ
田中(稲垣) 里芳 (慶應義塾大学)

発表要旨

16
時
25
分
—
17
時
5
分松
ヶ
崎
・
東
キ
ャ
ン
パ
ス
内
60
周
年
記
念
館
1F
記
念
ホ
ール

本発表は、黒人彫刻の「芸術化」に対して稲垣吉蔵の台座が果たした役割について、バーンズ・コレクションを中心に考察することを目的とする。

稲垣吉蔵(Kichizo Inagaki, 1876-1951)は、新潟県村上町出身の指物師・彫刻家である。1904年に東京美術学校彫刻科(入学時点では塑造科)を卒業、翌々年に渡仏した。1914年にロール・ペルトルと結婚、24年にはフランスに帰化し、日本に帰ることなく生涯を終えた。彫刻家ロダンとの交流が深く、作品の台座作りに貢献したことや、デザイナーであるアイリーン・グレイの作品を漆芸家の菅原精造らと共に作製したことが先行研究において指摘されている。しかしながら、稲垣と「アール・ネーグル(art nègre、黒人芸術)」との関係については、日本ではほとんど研究が進んでいない。

発表者は、欧米における「アール・ネーグル」の受容を考える際に、「芸術」の枠組みとしての稲垣の台座の存在に注目した。例えば、現在フィラデルフィアのバーンズ財団美術館が所蔵する黒人彫刻の全123点のうち84点に、彼の台座が付随している。実業家・コレクターのアルバート・バーンズは、当時のパリにおいて「アール・ネーグル」にまつわる動向の中心にいたギャラリストであるポール・ギヨームからそれらを購入した。そして、ギヨームが稲垣に台座製作を委託していた証に、彼がバーンズに送付した取引明細書には、“Inagaki bill (socles)”と明記されている。

本発表では、まず、台座に関わる先行研究を振り返り、稲垣の台座の歴史上の位置づけを明らかにする。続いて、美術館のレジストラーと実際に確認した台座の特徴を分析し、形式の確認を行う。

多くの台座と同じく、バーンズ・コレクションの黒人彫刻における台座は陳列・展示のための物理的機能と、オブジェに「権威」を付与する象徴的機能を持つ。後者の機能と、ピカソらのモダン・アートの作品と併置されたという展示方法に従って、当コレクションにおいて黒人彫刻は「芸術化」されたとみなされよう。

通常台座には製作者の署名は記されないが、稲垣の台座には印が施されている。アフリカ由来のオブジェに付随する台座に稲垣の印が見出された場合、それはすなわち流通時にパリのギャラリストが関わった証となる。稲垣は、「彫刻家」「芸術家」よりも「指物師(ébéniste)」として表現される場合が多いが、彼の台座と印が結果的にアフリカのオブジェに「価値」を付与したことが、少なくとも今日におけるその「芸術化」の一助となっているのではないだろうか。彫刻そのものの制作者と、概念を作り出したギャラリストや美術批評家・コレクターなどの周辺人物に次ぐ、第3の「アール・ネーグル」の「制作者」としての稲垣吉蔵の存在について指摘したい。